

所感

Post コロナ時代を見据えて

会長 川口博史



この原稿を書いている現在、COVID-19の新規感染者数や死者は減少傾向にあり、感染症のグループが5類になりました。まさにwithコロナ時代ですが、これからどうなっていくのでしょうか。

さて、私が神奈川県皮膚科医会の会長にお認めいただき1年がたちました。会長としての初仕事は銀行口座の名義変更でした。医会は、法人格を持たない親睦団体（町内会の囲碁クラブみたいなもの）の扱いで、名義の変更が煩雑です。歴代の会長がご苦労された話は何度も聞いていたので覚悟はしていましたが、まあ大変でした。名簿が必要といわれたり、総会の議事録を提出しろ、会則が必要、会則の文言を変えろとか（10年前に言われて変更した会則の文言をまた変えろと言われたり、特にY貯銀行）、プチ切れそうになるのを我慢して、1か月以上かかり変更できました。これらの作業もめどが立った時に自分がコロナに感染しました。7月21日の夜、診療を終えて支払基金に行こうと車で移動中、何か喉の違和感があり、審査初日ということもあり大事を取って支払基金には行かずに直帰しました。翌朝も熱はないが咽頭の違和感が続き、職場で抗原検査をしたらコントロールと同じ強さの線が出てしまいました。スタッフも全員検査しましたが2人が陽性でした。慌てて臨時休診の張り紙を出して、近くのH内先生に診察してもらいました。62歳だったので、モルヌピラビル飲みますかと聞かれ、飲んでみました。ニュースの映像でよく見たあの赤いカプセルです。療養期間中は自宅の1室にいましたが、22日の夜は38.9度まで発熱して辛かったです。モルヌピラビルが効いたのか、アセトアミノフェンが効いたのか、

基礎体力があったのか、翌日には38.2度まで解熱(笑)、0.7度の解熱でも体はかなり楽になりましたが、咳がひどくて寝不足でした。回復してくると暇を持て余すようになり、療養期間の後半は、手打ちうどんを作ったり、鉄道模型を並べて眺め鉄したりしていました。普段休日とは出かけることが多かったのが、外出できないのが苦痛で、部屋のPCで治癒後の撮り鉄計画を立てていました。その後秋から冬にかけて重症者や死亡者は減ってきて、コロナはもはや当たり前の風邪みたいになってきたと感じます。

年が明け、経済活動も動きはじめました。旅行割は何度か使わせてもらいましたが、観光地の人出も徐々に回復しています。春からはマスク着用の緩和や、手指のアルコール消毒機器の設置がなくなりました。今シーズンはハマスタでの鳴り物や声出し応援も解禁になりました。5類移行に伴い医療機関の診療体制も変わってきました。社会全体がまさにwith コロナになろうとしています。今後次の流行が来るのかしばらくは注視していく必要があると思います。

医会でもできれば対面での会を増やしたいと思っています。Zoomも便利ですが、人と人が面と向かって話をするのは、意思疎通に大変重要です。当面はハイブリッドでの会が多いと思いますが、対面での参加者を優遇する形で現地への参加を促したいと思っています。

結局なんだかんだとまだコロナに振り回された1年でした。近い将来、昔はこんなこともあったよね、とコロナを懐かしむくらい過去の出来事になってほしいものです。

最後になりましたが、事務局の瀬尾志津江さんが4月で退職されました。約20年間医会を支えてくださいましたことに感謝いたします。これからは後任の熊谷啓子さんをどうぞよろしくお願いします。



抗原検査



カプセル



ラゲブリオ

県と市と

幹事長 畑 康樹



2022年7月より神奈川県皮膚科医会幹事長を拝命いたしました。

さて、神奈川県皮膚科医会（以下県）の幹事長をお引き受けする3か月前には横浜市皮膚科医会（以下市）の幹事長もお引き受けし、奇しくも二つの医会の幹事長となりました。県も市もどちらの前幹事長とも親しくさせていただき、傍目でその仕事を見てきたものの、具体的にどのような仕事をするのかをきちんと把握せずに引き受けてしまいました。さらに同じ幹事長なのだから、似たような仕事だろうと高を括っていましたが、どちらも1年近く経ってみると勝手が違いました。幹事長とはどのような仕事をしているのか、県と市の違いを踏まえて少し触れてみます。

①カリキュラムコード：例会や勉強会などでカリキュラムコードを決めるのはどちらも幹事長の仕事です。県では神奈川県医師会より受講証作成のためにエクセル表のひな型を引き継ぎ、自分でそれを入力して秘書さんに送って印刷、必要とする会員にお配りします。市では横浜市医師会の担当者に連絡し、必要枚数を伝えると、横浜市医師会の方で受講証を作成してくれます。どちらも例会や勉強会が終わった後、参加者数を各医師会に報告するのは幹事長の仕事です。

②会の招集と例会演題の決め方：どちらも医会の運営を潤滑化するために様々な会を開き、各々の委員が集まって色々なことを決めています。県の方が所帯も大きく、現在委員会は6つあります。必要に応じて各種委員会を開きますが、その招集は各委員会の委員長が行います。それに加えて年3回の例会前に幹事会、5月、10月、1月に常任幹事会を開きますが、これらの招集は幹事長の仕事です。幹事会・常任幹事会の議案書は幹事長が作成しますが、議事録は庶務係が作成してくれます。例会は担当幹事を決めて企画委員会に2年前くらいから参加して

いただき、自分の企画したい内容を固めて、演者との交渉やプログラムの作成は担当幹事があたります。市では例会は増田智栄子会長の就任後「お互い顔の見える地域皮膚科医会」を目指し、横浜を3つの地区（北・南・西）に分けて3回に一度は各地区が担当するという形を取っています。県とは異なり特に担当幹事は決めずに各地区で企画委員会を開き、そこで所属する各地区の委員が自分の聞きたい演題の意見を出し合い、演題・演者などを決めていきます。演者との交渉やプログラムの作成は各地区の企画委員があたります。例会の1か月前には準備会を開きますがコロナ禍後はWebで行い、通信手段は可能な限りメールを活用し、市の医師会もそれを推奨しています。これらの企画委員会、準備会の招集は幹事長が行い、議案書や議事録も幹事長が作成します。

③会の運営：先述したように県の方が所帯も大きく、その運営には秘書さんの力をお借りしています。市では秘書さんは存在せず、横浜市医師会が協力的なものの、基本自分たちで会を運営しています。一方で県は今年度から秘書さんが20年務められた瀬尾さんから熊谷さんに代わります。委員会の再編も本格化して活動内容が変わり、ちょうど今は過渡期にあたります。それぞれの良いところを選択し、会員にとって有意義で、大学の垣根を越えた、参加しやすく良い雰囲気のある会になるよう、会の運営のお手伝いをしていきたいと思っています。幹事長に向いていないと言われたこともあります。しかし、役が人を育てると信じています。前幹事長とは異なり、魚や鉄分といった多彩な特技は持ち合わせていませんが、会員の皆様どうぞよろしく願いいたします。